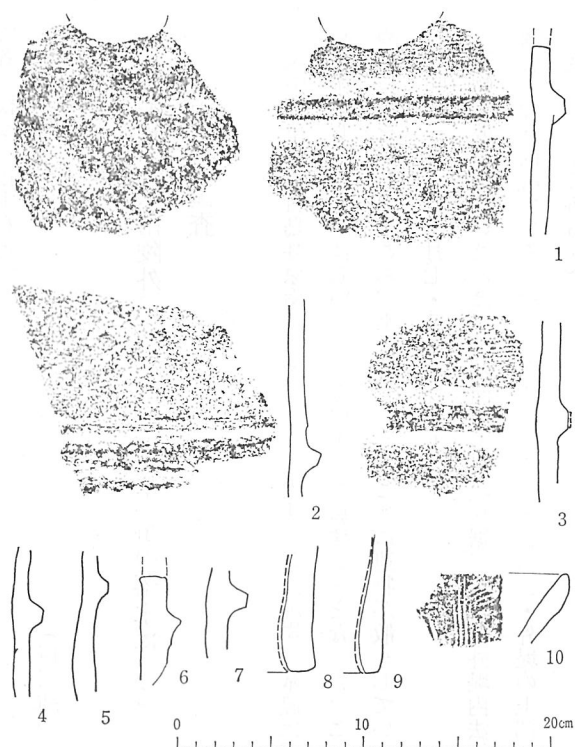




第26図 百舌鳥耳原南陵の採集品 (1/4)

採集された遺物は、計30片を数える。うち1片の土師器摺鉢を除くほか、すべて埴輪である。いずれも経年と水中にあったことで風化が著しい。

埴輪 (第26図1～9)

円筒ばかりで、形象埴輪は採集されなかった。成形は、粘土紐を積上げながら指でつまんでおさえ、なでつけたものである。内面に接合痕と斜方向のなでつけが認められるものがある。調整痕は、風化してほとんどとどめないが、1～3は、胴部外面に横方向の刷毛目を部分的に遺

す。突帯は、貼付けで、多くは突出度も高く、側面中央がくぼむ。6のように形のくずれたものもある。色調は、黄白色・橙色ないし茶褐色を呈する。内芯が灰黒色のものや外面に黒斑をもつものがある。埴質で、胎土は砂粒を多量に含む。直径は、基底部8が一八～二〇センチ、9が二三・四センチを計り、大きくはない。器壁の薄いものが少なくない(1～5)。

土師器 (第26図10)

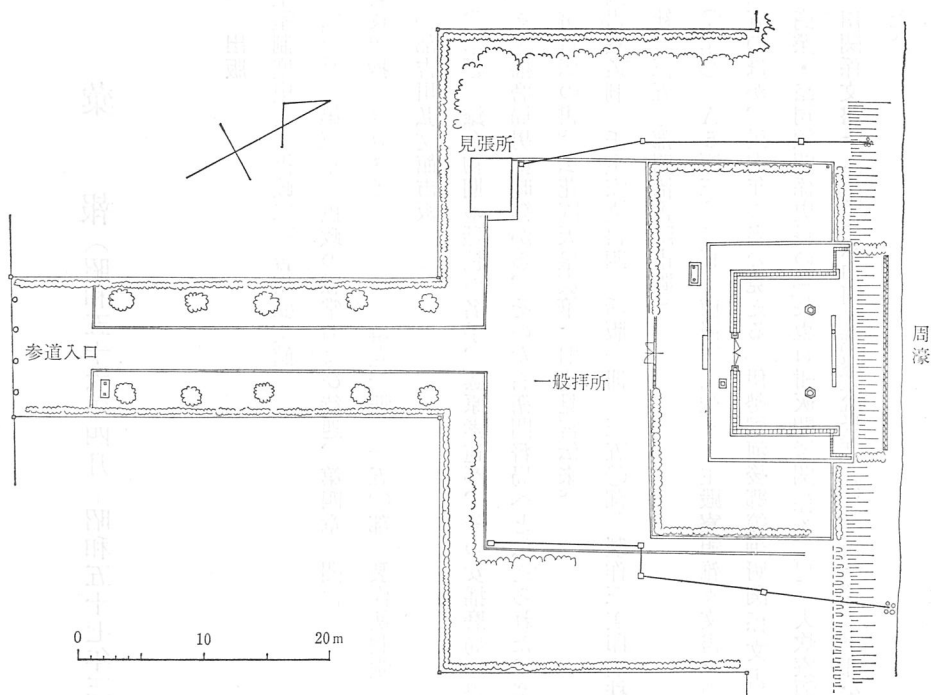
10は、摺鉢の口縁部。斜および縦方向のオロシ目が走る。口唇部に、煤が付着している。茶褐色を呈し、堅緻な焼成である。

(笠野 毅)

百舌鳥耳原南陵一般拝所排水管改修工事箇所調査

履中天皇の百舌鳥耳原南陵の拝所(第25図○印)の既設排水管、および排水樹の改修・新設工事を実施するにあたり、昭和五十七年三月十一日から十八日まで、立会調査を行なった。

掘削は、一般拝所南側および西側隅から、それぞれ庭園敷を経て、外堤に向かう総延長約八メートルを幅約〇・五メートルにわたって、手掘りで〇・六～一メートル掘り下げた(第27図)。土相は、表土、茶褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、小石を混じえた茶褐色砂質土(地山)が観察された。茶褐色砂質土、暗灰褐色砂質土は後世の盛土であろう。地山



第27図 百舌鳥耳原南陵調査箇所位置（太線部分）（1/600）

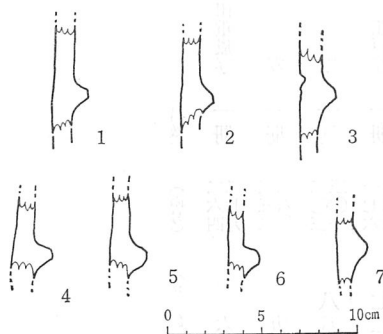
は、比較的浅く、地表下〇・四
〇・五メートルで検出され
た。しかし、一般拝所内は攪乱
されており、地山は確認され
ていない。遺構は検出されな
かったので、予定通り施工した。

出土した遺物は、埴輪片九
点、瓦片一点である。いずれも
外堤内法肩に近く、茶褐色砂質
土から検出され、磨耗が著しい。内訳は、北西側の掘削溝から二点、南
東側から八点（瓦片を含む）である。

埴輪円筒（第28図） 全てが胴部の破片である。小片となっているた
め、径の復元は困難である。突帯は大きく張り出すが、器壁がやや薄い
ということもあって、力強さは感じられない。台形状に張り出すもの
（1～4）、端部がやや丸味を帯びるもの（5～7）がある。茶褐色系の
色調を呈する。胎土は、砂質気味で、黒色の粒子を含んでいる。5には
黒斑が認められるが、他は小破片であるため、その存在は明らかでな
い。

瓦 小片で、両面ともに磨耗しているため、図示できない。平瓦と
思われる。砂質気味の胎土を使用し、片面のみに、黒く燻した面をとど
めている。

（福尾正彦）



第28図 百舌鳥耳原南陵の出土品（1/4）